

跡も次第に失はれつゝあります。——要するに、國內の不協和、極端な國家主義等の支持者があるにかゝはらず、宗教や、人種に對する古い偏見から來るあらゆる困難を持ちながらも、今日天空を覆うてゐる雲間を通して、深甚なる人心の要求が、新しい文化の曙光を投げて居るのであります。

而も此度は、「歐洲の文藝復興期の如くギリシア、ロマの古代を再現するのみにあるのではなく、我々が期待し、我々が豫想するものは、更に廣大無邊なる革新であります。之は未だ方式をなして居ませんが、アジアの平和な智見と、歐米の驚異すべき物質的進歩との調和であつて、科學的美術的道德的の一大綜合であります。而して、全人類が悉く、之に安住する日もあらうと思ふのであります。今こゝで、極東と極西との出會點である此の島國の地位に注目し、其の國民の潤々として倦怠のない精神を思ひ、更に、六十年來、此の國民が毫もその生氣と創意とに困ずる事なくして、其の爲すべきを知つてなし遂げたこの類のない變革に思ひ到れば、日本が、世界の新思想を鍛へ上げる坩堝の一であるべき事は、諸氏に於ても疑ふ餘地はなからうと考へる